

パワフルチーム

スポーツチャンバラクラブ



ニュー武道です。目や耳を保護する軽いマスクをかぶり、構え方や足の運びも自由で、相手のどこを打ってもO・Kです。試合では、剣が相当の強さで先に当たった方が勝ちとなります。

このスポーツは、約二〇年前に警備会社の教官をしていた、国際スポーツチャンバラ協会の田辺哲人会長が剣道と護身術を元に考案したものです。現在では、特に関東・東海地区でさかんで、大阪で約千人の愛好者がおられ、年一回、世界大会も開かれています。

気合を入れて力いっぱい打つのでストレス解消、しっかり汗をかく全身運動なので体力増強、シェイプアップにも最適、自由に楽しく打ち合う中で護身術も身につく、老若男女問わず楽しめるスポーツです。

このクラブには、現在、小学生から中学生を中心に約十五名。「エイッ、ヤー」のかけ声でおもいっきり相手を打っています。

入ったその日から始められます。この護身道を通して、練習にもいろんな運動をとり入れ、体を鍛えることを大切にしています。また、制約や難しい流儀がないので、自分の工夫で自由にやっていることも魅力のひとつです」と、クラブの責任者、平井正明さんは話して下さいました。

誰でもすぐにやれるということでも挑戦。思いっきり打たせてもらったり、打たれたり。痛みもなく、気分もすっきりとした感じでした。手軽にいろんな人が参加できるスポーツ。北海道では障害者団体の大会も開催されているとのこと。みなさんもぜひ一度やってみませんか。

練習場所 山直市民センター
時間 毎週金曜日 午後七時から八時半
※岸和田市総合体育館でも行っています。

詳しいお問い合わせは、
第一・第三・第五 木曜日
平井さん 〇七二四 三八一 一七九四(夜)

〇六 七一九 一六七四〇(昼)
有朋道場本部事務局 〇七二四 八三一 二〇五二

子どもの頃、誰もがやったことのあるチャンバラごっこ。それをそのままスポーツにした「スポーツチャンバラ」をご存じですか。今回は、約四年程前より山直市民センターで練習されている「スポーツチャンバラクラブ」を訪ねました。スポーツチャンバラは、発泡スチロールで作ったソフト剣で自分流に打ち合う

帰ってきたチャンバラ

WHAT SPORTS

美齋津二郎

text by Jiro Misaizu

菊地和男 撮影

photographs by Kazuo Kikuchi

道場は、机を片付けた教室である。

生徒たちが手にしているのは、長さ60センチほどの小太刀、獲物と呼ばれるソフト剣だ。

防具は学校のジャージに、プラスチック製の面をつけているだけ。剣道よりも、はるかに身軽だ。

「よし、始め」

先生のかげ声と同時に、打ち合いが始まる。「バシッ」「バシッ」と獲物を打ち込む音が、教室いっぱいに響く。上段の構えから相手の面に打ち込む者もいれば、足元を狙って飛び込む者もいる。

「同じ武道でも剣道の場合、まず決まった型を覚えることから始

まりますが、スポーツチャンバラには、こうでなければいけないという型はありません。一刀流でも、二刀流でも、その人の好きな構えで自由に打ち合うことができます。それぞれの個性や工夫を、生かそうという発想です」

生徒たちの指導に当たっている新宿区立戸山中学の細川健一先生が、教えてくれた。

スポーツチャンバラ、この名称から本格的な武道を連想できる人は、どれだけいるだろう。

子どもの頃、近くの空き地で夢中になって遊んだチャンバラっこ。あのチャンバラの、何の制約もない、のびのびとしたぶつかり合いを、日本の伝統的な古武道の中に持ち込んだら、果たしてどんな新しい格闘技が見えてくるか。

それを実践したものが、最近では小中学校の部活にも取り上げら



れるようになったスポーツチャンバラだが、このユニークな名称の武道が誕生した背景には、戦後、団体などの競技スポーツとして発展してきたために、格闘技としての魅力を失いつつある古武道に対する、武道家からのアンチテーゼがあった。

たとえば現在、団体に参加が認められている古武道は6種目ある。そのうち剣道、銃剣道、なぎなたは、いずれも重い防具を身につけて戦う武道だが、これらはまた、攻撃に際しての制約が多いことでも知られる。剣道では、攻撃は防具をつけている小手と面と胴を、それも正面から踏み込んで打つことしか許されていない。

防具のない足元はもちろんのこと、横から面を打つことなども、安全面から禁じられている。

「だがそれは、本来の武道の姿からすれば、おかしいのではないかと、一部のしか攻撃が許されないのでは、本当の意味で格闘技と言えるのか。横から打つなというこ

とは、実戦に即した武道という面から見てもおかしい。もし安全を言うなら、なぜもっと早く、武器の改善を行わなかったのか……。そんな疑問から、古武道というものを究め直してみたら、そこに防具をつけない格闘技としてのチャンバラがあった。チャンバラなら棒きれ一本で身を守る護身術としてもすぐれている。そこで小太刀護身道という新しい武道を作り、ニックネームとしてスポーツチャンバラと名づけたのです」

こう語るのは、この武道の発案者で「国際スポーツチャンバラ協会」を主宰する田邊哲人である。

あくまでも護身をテーマにした、実戦的な武道の追求、だからここでは、ほかの武道では認められている相打ちを、両者敗退としている。

相打ちが戦時中に、多くの武道が「戦技」として利用された時代の名残り。自分がやられてもいいから、相手も倒せという特攻精神は、護身とは正反対に位置すると、きつぱりと否定している。

また防具は面だけにしたことも、護身の意味を強調するためという。

スポーツチャンバラで使用するソフト剣は、プラスチックの芯に発泡スチロールを巻き、その上からレザーをかぶせるなど安全性を確保しているとはいえ、それでもまともに体に当たれば、やはり痛い。この痛みを知ることで、打たれないための工夫や、痛みをこらえる忍耐力が養われるというのだ。

「また獲物自由といって、剣の長さを自由に選んで戦うルールもある。これは年齢や体格のハンデを、武器を選ぶことで公平にしようというもので、年配者が長い剣を持つてば、短い剣の若者とも互角に戦うことができる。安全と公平が担保できれば、あとは難しいルールはいらないという、まさにチャンバラっこと同じ発想なのです」

かつて日本の武道が持っていた、実戦に近い緊張感、それを取り戻したことでスポーツチャンバラは、国内ばかりか海外でも多くの競技者を増やしている。現在では世界

30数カ国に広まり、競技人口は10万人以上。この12月には国際大会の「第19回国際スポーツチャンバラ選手権大会」も開催される。

また防具が簡素で、厳しい作法や難しいルールがないことから、若い世代にも受け入れられている。

新宿区立戸山中学では、この春細川先生の赴任と同時に「護身道部」を設立。今では40人を超える部員が、剣を手に汗を流している。もちろん彼らはチャンバラっこばかりか、兄弟ゲンカも知らないと言われる世代だ。

「そんな生徒たちに最初に教えることは、自分が打たれたと思ったら、素直にそれを認めて、退くこと。自分の痛みをそれで自覚することができれば、人の痛みも分かる人間になれる。それが日本に伝わる武士道というものなのだ」と

昔の剣豪は、大きな道場や幾多の合戦の中から培われたという。だが現代の剣士は、こんな小さな教室の道場から、育っている。■